



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)



交響曲 第39番 変ホ長調 KV543

Symphony No.39 in E flat major, KV543

- | | |
|----------------------------|---------|
| 1 オープニング | |
| Opening | |
| 2 第1楽章 アダージョ - アレグロ | [11:53] |
| I .Adagio - Allegro | |
| 3 第2楽章 アンダンテ・コン・モート | [09:42] |
| II .Andante con moto | |
| 4 第3楽章 メヌエット アレグレット | [04:04] |
| III .Menuetto allegretto | |
| 5 第4楽章 アレグロ | [07:53] |
| IV .Allegro | |

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 Wiener Philharmoniker

指揮: レナード・バーンスタイン Conducted by Leonard Bernstein

監督: ハンフリー・バートン Directed by Humphrey Burton

収録: 1981年 ウィーン、ムジークフェラインザール Musikvereinssaal Wien 1981

●バーンスタインとウィーン・フィル～モーツァルトを中心に

山田 治生

バーンスタインがウィーン国立歌劇場にデビューしたのは、1966年3月のヴェルディの《ファルスタッフ》だった。最初のリハーサルで、彼が《ファルスタッフ》の冒頭を振り始めたとき、バーンスタインとウィーンの音楽家たちは恋におちた。「3小節を過ぎるともう我々を束縛するものではなく、これが生涯を通じて続く関係になることを感じた」とバーンスタインは振り返る。

続いて、バーンスタインはウィーン・フィル（周知の通り、ウィーン国立歌劇場管弦楽団の精鋭メンバーにより構成されている）の演奏会にも登場し、モーツァルトのピアノ協奏曲第15番（弾き振り）やマーラーの交響曲《大地の歌》を取り上げた。バーンスタインは、モーツァルト作品の最初のリハーサルで、「これはあなたたちのモーツァルトです。私はあなたたちから何かを学びたい」と述べたという。バーンスタインがウィーン・フィルとマーラーに取り組んでいた70年代前半、リハーサルで自分がやろうとしているマーラー演奏に対してウィーン・フィルから反発の言葉や抵抗を受けたというエピソードとは対照的だ。ウィーン・フィルと出会ったバーンスタインは、彼らからモーツァルトを学び、彼らにマーラーを教えようとしていたのである。

1967年6月にウィーン・フィルと再び共演し、マーラーの交響曲第2番《復活》を指揮。翌1968年4月にウィーン国立歌劇場に再登場し、R・シュトラウスの《ばらの騎士》を振り、レコーディングも行った。そして引き続き、ウィーン・フィ

ルの定期演奏会に登場し、モーツァルトのピアノ協奏曲第17番を弾き振りしたのであった。

1969年5月にニューヨーク・フィルの音楽監督を退任したバーンスタインは、すぐにウィーンへ飛び、ウィーン国立歌劇場でベートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」を指揮した。ニューヨーク・フィルを離れフリーの身となったバーンスタインは、70年代、80年代を通じて、ウィーン・フィルと密接な関係を築いていく。

70年代にはウィーン・フィルとマーラーやベートーヴェンに取り組んでいたバーンスタインだが、80年代に入ると、彼らとドイツ・グラモフォンにモーツァルトの交響曲の録音を開始する。

まずは、後期六大交響曲から。81年10月に第39番をライブで録音した後、84年1月に第40番と第41番《ジュピター》、84年10月に第35番《ハフナー》と第36番《リンツ》、そして85年10月に第38番《ブラハ》を録音した。その多くが演奏会のライブ録音だったが、第36番と第38番はセッション録音だった。また、81年10月のピアノ協奏曲第17番のライブ録音が後にCD化されている（この度DVDにもなった）。

その後、87年9月に第29番とクラリネット協奏曲、88年10月には第25番を、ともにライブ録音している。

ニューヨーク・フィル時代にモーツァルトの交響曲で録音したのは、第36番、第39番、第40番、第41番だけで、第25番、第29番、第35番、第38番はウィーン・フィルとの出会いによって初めてレコーディングされた。ウィーン・フィルがバーンスタインのモーツァルトの世界を広げたといっても過言ではないだろう。

このDVDに収められている交響曲第39番の演奏は、ドイツ・グラモフォンへの録音と同時期のものである。81年10月、ウィーン楽友協会大ホールでの、ブラームスの《悲劇的》序曲、モーツァルトの交響曲第39番、ブラームスの交響曲第4番、というプログラムの演奏会からライブ収録されたものと思われる。80年代のバーンスタイン＆ウィーン・フィルのモーツァルト・シリーズのスタートとなった演奏である。

ここでは、指揮者として最も充実していた頃のバーンスタインの演奏を聴くことができる。堂々としていて、優雅で、少しロマンティックな、極上のモーツァルト演奏。ゆったりとしたテンポとチェロ8人＆コントラバス6人という編成は、小振りなオーケストラで軽快に奏でる今風のモーツァルトとはかなり違うが、その演奏は全然古臭さを感じさせない。そして最も興味深いのは、派手な指揮ぶりで知られたバーンスタインがここでは必要最小限の動きしかしていないことだ。それは、ウィーン・フィルのモーツァルト演奏への全幅の信頼を示すものであろう。特に第4楽章の後半では、指揮する手を止めてしまい、演奏する楽団員をただ満足気にながめている。すべてが上手くいっているから指揮者が入り込む必要はないということなのであろう。ウィーン・フィルとの信頼関係の強さを示すバーンスタインらしい演出といえる。なお、収録当時あまり実行されることのなかった第4楽章の後半（展開部以降）のリピートを励行しているのは、バーンスタインの原典尊重の意思表示に違いない。

●モーツァルト：交響曲第39番 変ホ長調 K.543

モーツァルトは、1788年の夏、交響曲第39番、第40番、第41番《ジュピター》の3つの交響曲を一気に作曲した。その最初の変ホ長調の交響曲は、1788年6月22日に書き上げられた。

1782年に歌劇《後宮からの逃走》の成功によって、ウィーンで圧倒的な支持を得たモーツァルトだが、1788年頃には、オーストリアが参戦したトルコ戦争の影響で貴族が音楽を楽しむ余裕を失い、モーツァルトの人気もかげり、彼は借金を重ねるようになっていった。経済的危機に瀕したモーツァルトは、次第にフリーメーソンに傾倒していき、創作での関心も、聴衆よりも自分自身の世界に向けられるようになった。

モーツァルトが最後の三大交響曲を作曲した理由は不明である。そのため、モーツァルトが純粋に自らの芸術的欲求に従い、自らのために書いたのだろうと長い間考えられてきた。しかし、近年の研究では、モーツァルトがウィーンやイギリスでの演奏会を念頭に作曲した、あるいは、3曲をセットにして出版することを意図していたなどの仮説が提起されている。また、初演に関しても、モーツァルトの生前には演奏されなかったと信じられてきたが、最近の研究では生前に初演されたとの考えが一般的である。

交響曲第39番は、オーボエを用いず、モーツァルトの交響曲にしては珍しくクラリネットが使用されている。それゆえに全体的にまろやかな響きが特徴となっ

ている。

第1楽章：堂々と主和音が奏でられ「アダージョ」の序奏で始まる。ティンパニが有効に使われているのが特徴的である。そして「アレグロ」の主部に入り、3拍子に転じる。第1主題は優美で気品がある。第2主題は弦楽器の弾く8分音符の音階に管楽器が応えるもの。

第2楽章：アンダンテ・コン・モート。穏やかな緩徐楽章だが、へ短調の部分では悲しみが急激に昂る。

第3楽章：メヌエット、アレグレット。全楽器による主和音に続いて、ヴァイオリンが上昇音型を奏でる。トリオ（中間部）では2本のクラリネットが活躍する。

第4楽章：フィナーレ、アレグロ。冒頭の第1主題が姿を変えたりしながら無窮動的に駆けめぐっていく。

●レナード・バーンスタイン

指揮者としてだけでなく、作曲家、ピアニスト、教育者、著述家、平和運動家として活躍した「音楽家」。1918年8月25日、米国マサチューセッツ州ローレンスに生まれた。10歳のときに伯母からピアノを譲り受け、音楽の才能を開花させる。ハーヴァード大学時代にミトロプーロスから強い影響を受け、カーティス音楽院でライナーに指揮を師事。40年にはタングルウッドでクーセヴィツキーに学ぶ。

43年8月、ニューヨーク・フィルの副指揮者となり、同年10月に急病のワルターの代役でニューヨーク・フィルにデビュー。センセーショナルな成功を取めた。44年には、ピッツバーグ響で自作の交響曲第1番《エレミア》を初演。45年から48年まではニューヨーク・シティ響の音楽監督を務める。53年にスカラ座デビュー。57年には作曲を担当したミュージカル《ウエスト・サイド・ストーリー》が大ヒットした。

57年、ニューヨーク・フィルの首席指揮者となり、58年から69年まで同フィルの音楽監督を務めた。その間、マーラーの交響曲全集の録音を進める。また、指揮、司会、台本執筆を担当した「ヤング・ピープルズ・コンサート」が大人気を博した。

66年に《ファルスタッフ》を指揮してウィーン国立歌劇場にデビュー。69年にニューヨーク・フィルの音楽監督を退任してからは、フリーの指揮者として、

ウィーン・フィル、イスラエル・フィル、コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、サンタチェチーリア国立アカデミー管、などに客演。79年にはベルリン・フィルを指揮。作曲家としては、《オン・ザ・タウン》や《キャンディード》などのミュージカル、3つの交響曲のほか、「ミサ曲」やオペラ《静かな場所》などの大作を残す。

教育活動にも熱心に取り組み、タングルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭で後進の指導にあたるほか、90年夏には札幌でPMFを創始した。

1990年10月14日、ニューヨークの自宅で永眠。